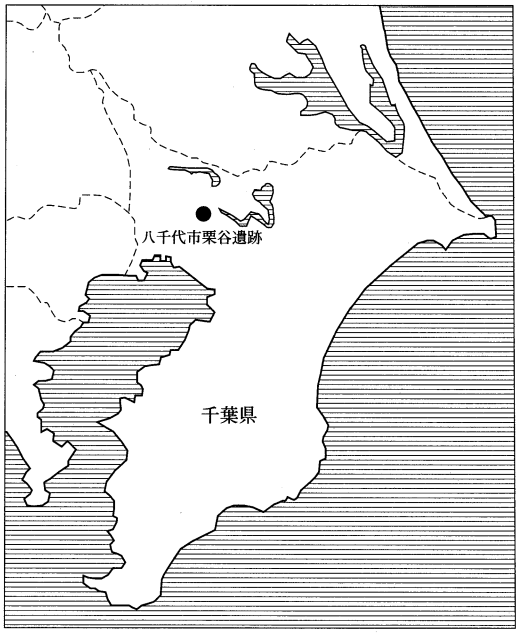
千葉県八千代市

栗谷遺跡

（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

— 第2分冊 —



2003

大成建設株式会社

八千代市遺跡調査会

凡　　例

1．遺構番号は発掘調査時には、遺構種別ではなく調査地区ごとの通番号を付与した。遺物の注記、図面・写真への記録はこれによった。しかし、本書では遺構別に通番号を新たに付与し直した。この遺構番号については、第１章に新旧番号の対照表を掲載したので参照していただきたい。

2．本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれも一部改変・合成して使用している。

図１　国土地理院発行　1/25,000地形図　「小林」「佐倉」「白井」「習志野」（平成12年発行）

図２　大成建設株式会社発行　1/4,000　Ｙ．Ｋ，プロジェクト　空中写真測量図（昭和63年発行）

3．本書の挿図において、方位の表示のないものについては、公共座標に基づく座標北を上としている。

4．本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2) 縮尺率は原則として以下のとおりとするが、これ以外のものについては、図中に示したスケールを参照されたい。

住居跡　1/80　　掘立柱建物　1/80　　方形周溝墓　1/100　　土坑　1/50　　溝　1/50　　炉穴　1/50

(3) 住居跡平面図に使用した一点鎖線は、床の硬化範囲を示している。

(4) 遺構実測図で使用した破線は、推定復元線を示している。

(5) 遺構実測中のスクリーントーンの表示は原則として以下のとおりであるが、個々については実測図脇に表示した凡例を参照されたい。

火床　　竈　　焼土　　粘土　　柱痕　　貝

(6) 竈のある住居跡にあっては、長軸と短軸の距離及び方位は、各コーナーから対角線に線を引いた上で住居の中心を出し、その中心の壁間での計測値を出した。また、主軸は煙道にて計測した。

5．本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 縮尺率は原則として以下のとおりであるが、個々については図脇に示したスケールを参照されたい。

土器実測図　1/4　　土器拓影図　1/3　　土製品　1/3　　石器・石製品　1/2　1/3　1/4

鉄器・鉄製品　1/4　　銅製品　1/2　　支　脚　1/4

須恵器　　釉薬　　磨耗痕　　赤彩　　黒色処理・煤・繊維土器

(2) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。

(3) 墨書・朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書は不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はベタ塗りで、不明瞭な部分は20％のトーンをかけて処理した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は縁取りを行った。なお、推定復原部分は破線で示した。

墨書　　墨書（不明瞭部分）　　朱書　　朱書（不明瞭部分）

第１章　栗谷遺跡Ⅱ地区の概要

第１節　栗谷遺跡Ⅱ地区の調査の経緯

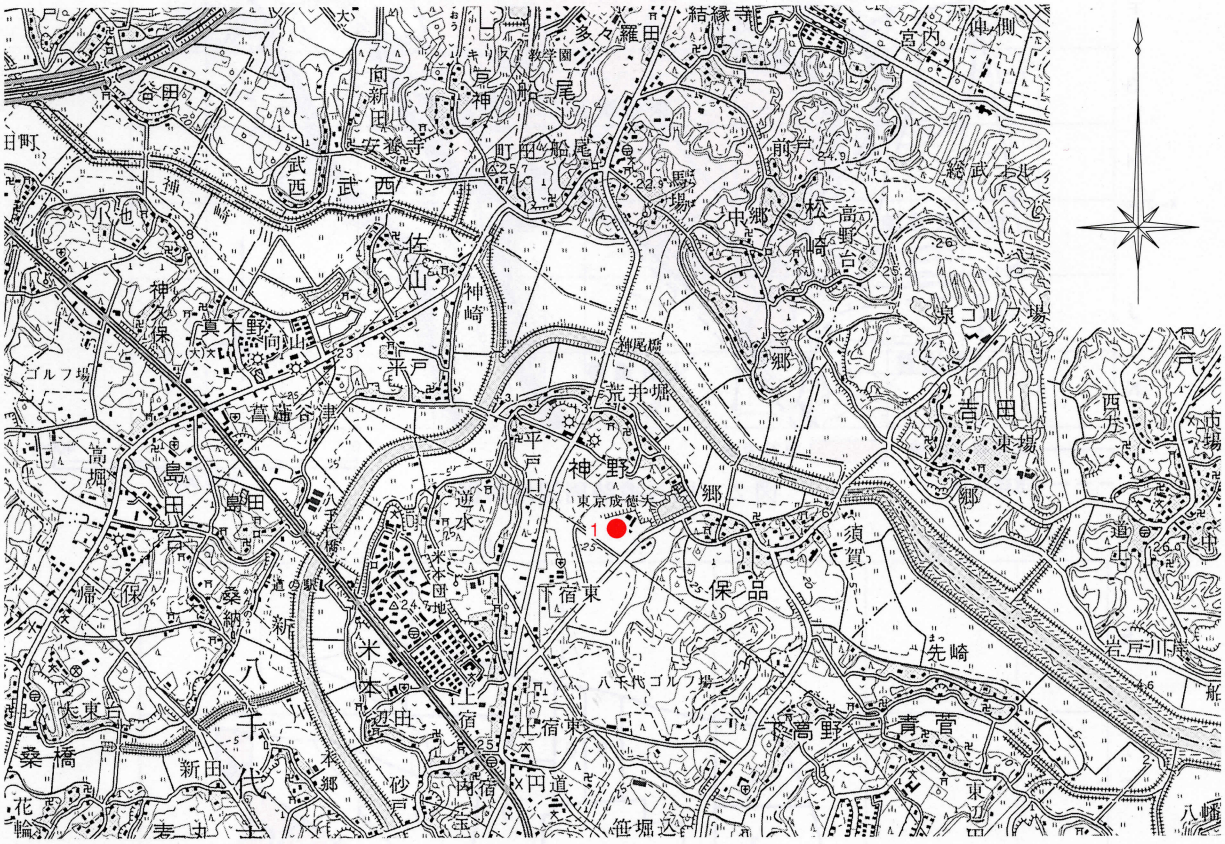


図１　栗谷遺跡位置図（1/50,000）

栗谷遺跡の発掘調査は（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連区域内における埋蔵文化財発掘調査の一環として、昭和63年３月から開始された。例言に記した通り、本報告は「（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財発掘調査調査報告書」のシリーズ３にあたる。事業全体に係わる経緯及び経過の詳細については、既刊の「栗谷遺跡－第１分冊－」を参照していただきたい。ここでは、栗谷遺跡Ⅱ地区の調査経緯について簡単に触れておきたい。

栗谷遺跡の発掘調査は、昭和63年３月から開始され平成６年７月までの間、断続的に実施された。栗谷遺跡Ⅱ地区にあたる地区は、第２次本調査地区（平成元年７月～平成２年10月）、第３次本調査地区（平成３年１月～平成３年12 月）、第４次本調査地区（平成３年７月～平成４年６月）の一部が該当し、面積の合計は、約28,000㎡である。

調査方法としては、公共座標に沿って、グリッドを設定した。100m単位で大グリッドとし、10m単位で中グリッド、さらに、５m単位を小グリッドとして調査を行った。調査対象区域の１～２％程度を包含層検出の為の人力による表土除去作業を行い、包含層が検出されない区域については、重機による表土除去作業を行った。遺構検出作業は基本的にソフトローム上面で行った。写真撮影等の記録を取りながら遺構覆土の除去を実施した。撮影にはブローニー判モノクロフィルムを基本としながら35㎜モノクロフィルム、及び35㎜カラーリバーサルフィルムを使用した。測量については、通常の遣り方実測に加え、光波測距儀による測量、航空写真による測量を適宜用いて行った。

表28　A073遺物観察表　　（単位cm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	－×5.80×16.4　輪積 外面　頸部－輪積痕　胴部－ナデ　下半－ハケ状工具でのナデか？ 内面　ナデ　頸部－輪積痕残存　胴部－中央部そろばん玉状に膨らむ	暗褐 普	普 砂粒少	ほぼ 完形	口縁部欠損
2	土師器 甕	(11.6)×－×(7.30)　輪積　外面　口縁部－ヘラケズリ　頸～胴部－ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　口縁部－ヘラケズリ後ヘラミガキ　胴部－ヘラケズリ　口縁－外反　胴部－長胴	暗赤褐 普	普 粗砂粒少	1/2	
3	土師器 甕	－×3.00×(2.60)　輪積 外面　ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面　ヘラケズリ後ヘラミガキ	暗赤褐 普	普 粗砂粒多	1/4	ミニチュアの鉢か？

A073

遺　構　　ロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に16層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　　覆土中から少量出土。

所　見　　出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

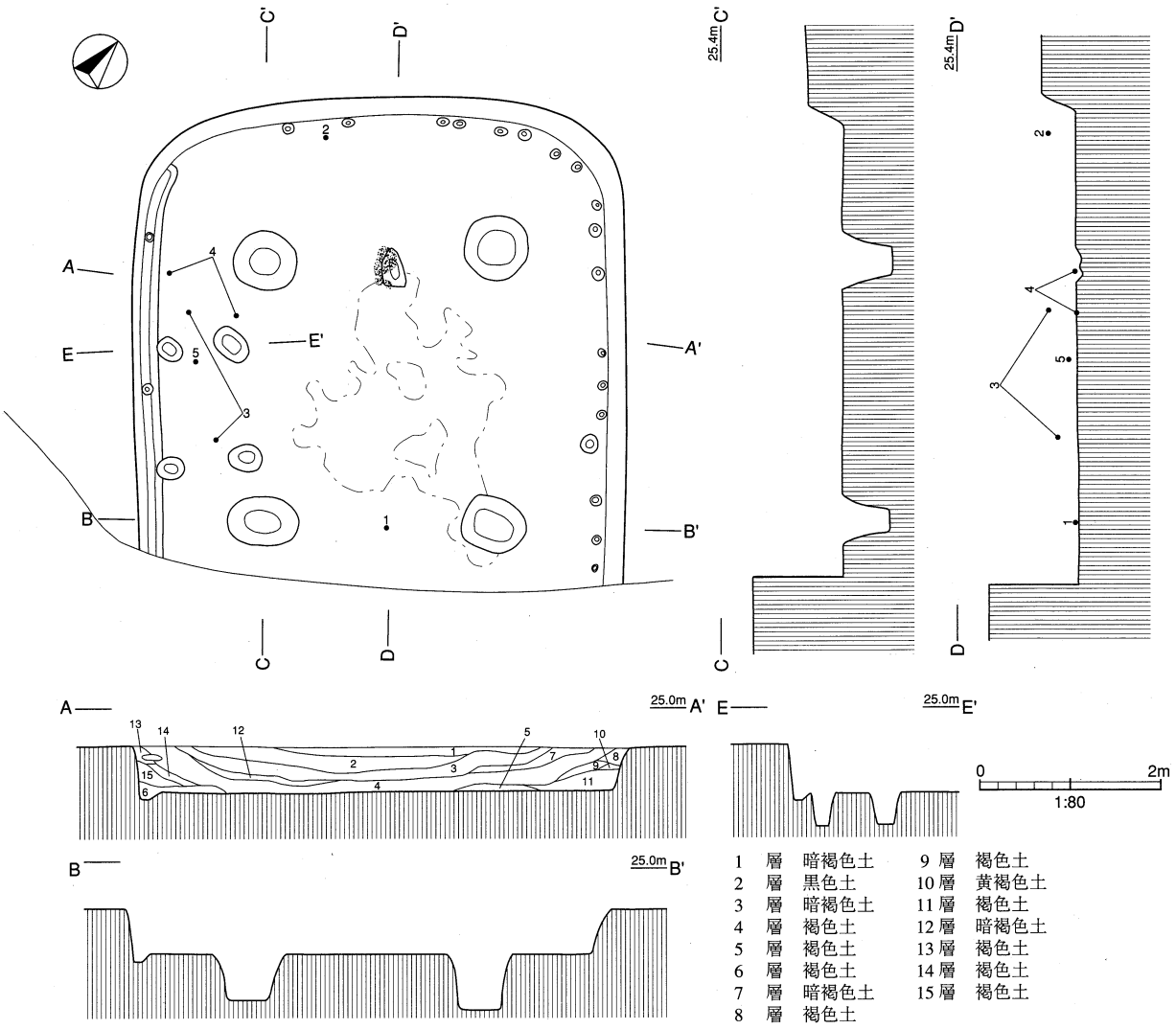


図75　A074

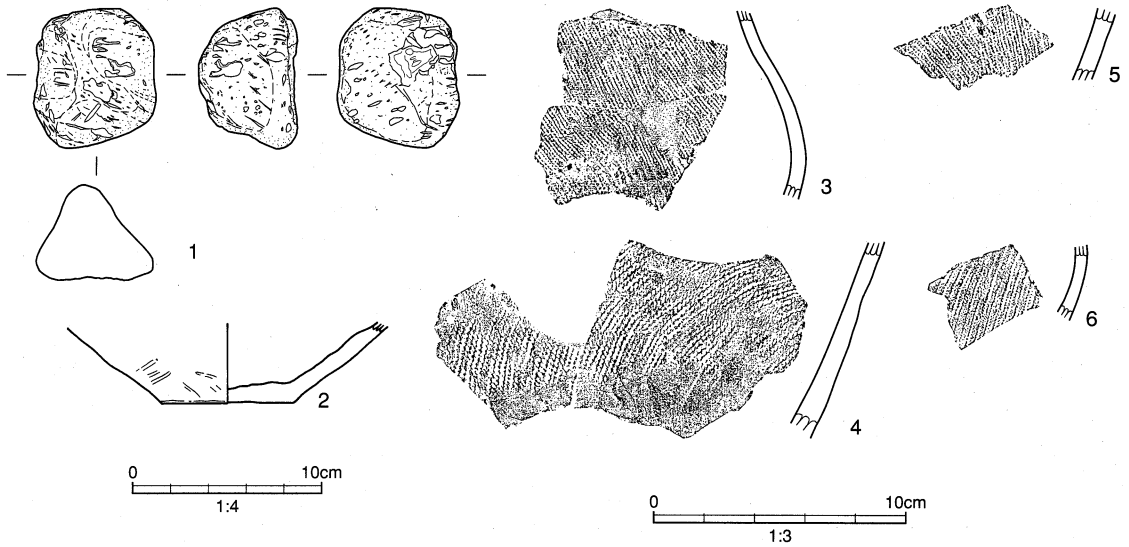


図76　A074(2)

表29　A074遺物観察表　　(単位cm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石製品	7.40×6.50×厚さ5.10　391g 平面－隅丸方形　断面－三角形に近い 中央部が研磨され大きく凹む				大型の軽石製品
2	弥生 壺	－×(7.00)×(4.00)　輪積 外面　ナデ後ヘラミガキ　器面の磨耗が著しい 内面　器面剥離のため不明　底部－平底	明橙褐 軟	粗 粗砂粒 雲母多	底部片	
3	弥生 甕	輪積 外面　頸部の下端一部残存－ナデ　胴部－付加条縄文 内面　ナデ	明橙褐 普	普 砂粒多	1/4 以下 胴部片	
4	弥生 甕	輪積 外面　付加条縄文　下端－ナデ後一部ヘラミガキ 内面　ヘラケズリ後ナデ一部ヘラミガキ	明橙褐 普	普 粗砂粒 多	1/4 以下 胴部片	
5	弥生 甕	輪積 外面　付加条縄文 内面　ナデ後ミガキ	褐 普	普 粗砂粒 多	1/4 以下 胴部片	
6	弥生 甕	外面　付加条縄文 内面　ナデ	暗褐 普	普 砂粒多	胴部片	

A074

遺　構　　遺構範囲が調査区外に延びているため、規模については不明だが、形態については、隅丸の住居跡と考えられる。床はロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に15層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　　覆土中から少量出土。床面直上の遺物としては(4)と(5)の付加条縄文を施した甕形土器の胴部片が挙げられる。(6)は覆土中からの出土であった。

所　見　　出土遺物から弥生時代後期、印手系の住居跡と判断した。

A075

遺　　構　　ロームを踏み固めた床で、壁際に硬化面が広がる。住居跡中央部では、やや軟弱であった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に17層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　　覆土中から小破片が少量出土。

所　　見　　柱穴が２本のタイプの住居跡で本遺跡では、珍しいタイプである。出土遺物等から弥生時代後期の住居跡と判断した。

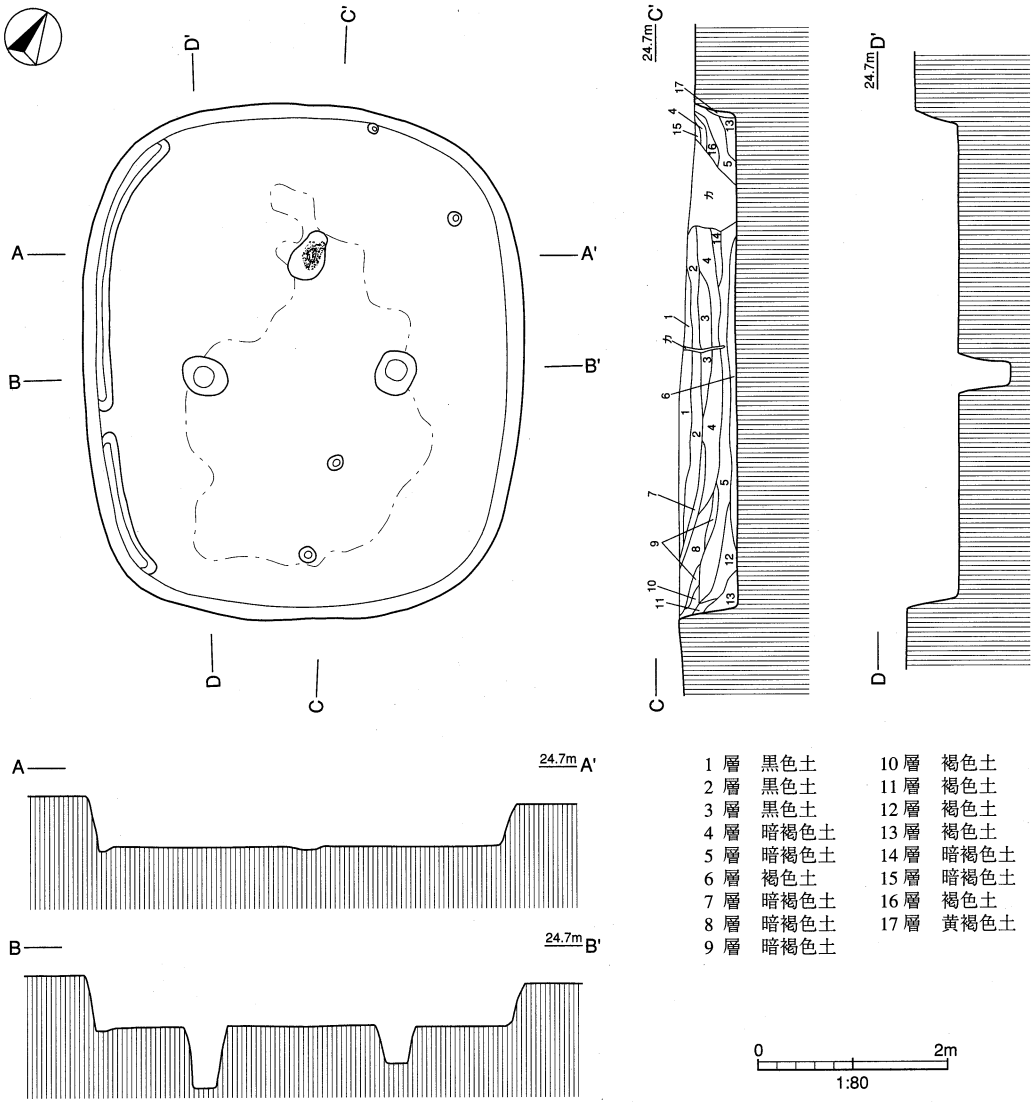


図77　A075

A076

遺　　構　　ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部では、やや軟弱であった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に16層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　　床面直上から覆土中にかけて少量出土。

所　　見　　出土遺物・住居跡の規模・形態等から弥生時代後期の住居跡と判断した。本遺跡では、大型の住居跡に属する。

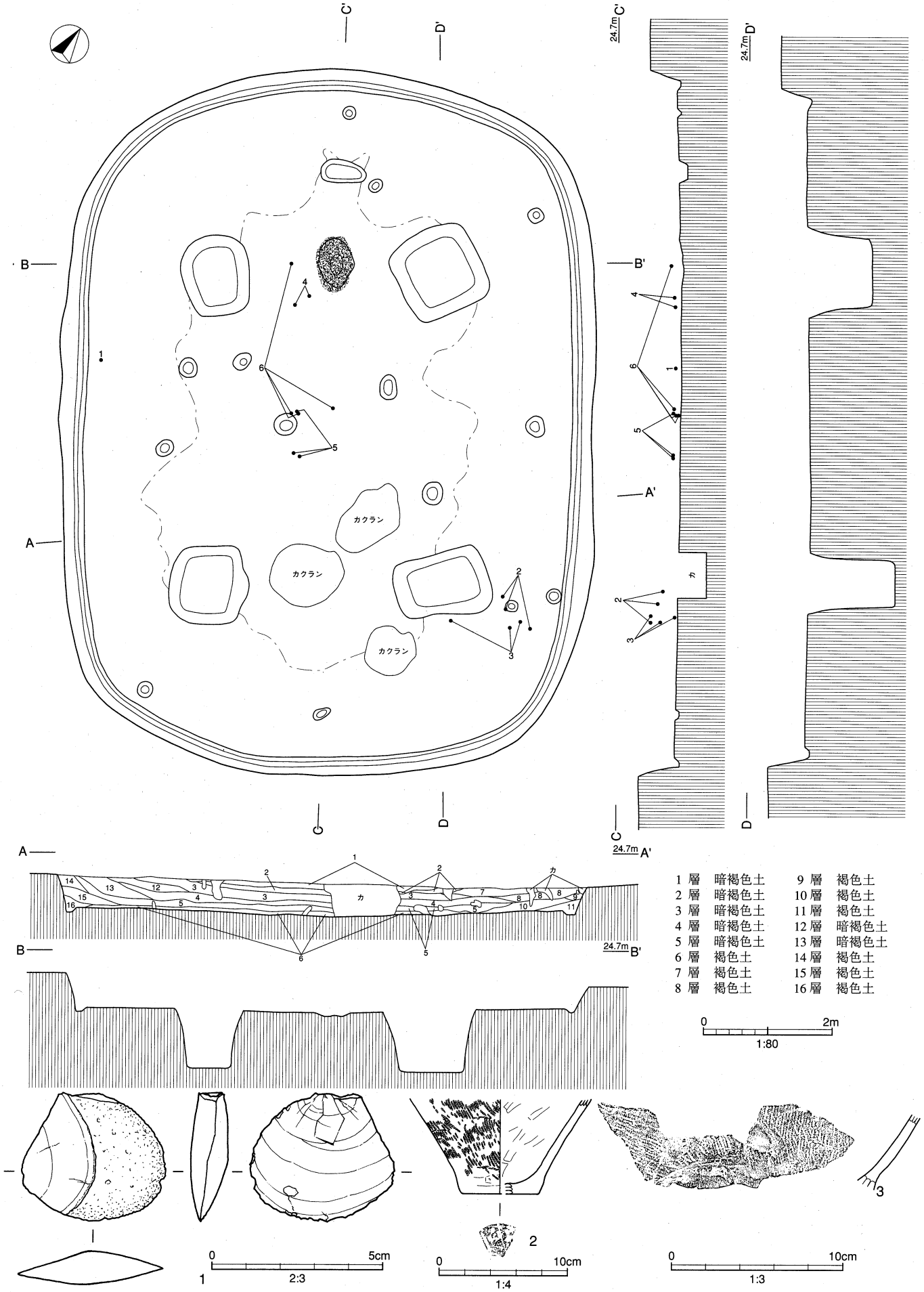

カクラン
カクラン
カクラン
24.7m
1 層　暗褐色土
2 層　暗褐色土
3 層　暗褐色土
4 層　暗褐色土
5 層　暗褐色土
6 層　褐色土
7 層　褐色土
8 層　褐色土
9 層　褐色土
10 層　褐色土
11 層　褐色土
12 層　暗褐色土
13 層　暗褐色土
14 層　褐色土
15 層　褐色土
16 層　褐色土
0　2m
1:80
0　5cm
2:3
0　10cm
1:4
0　10cm
1:3

図78　A076

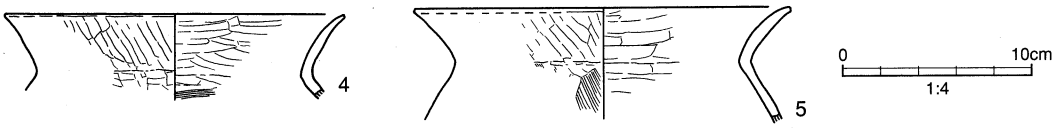


図79　A076(2)

表30　A076遺物観察表　　(単位cm)

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	剥片	3.80×4.30×厚さ1.10　16.6g 幅広の円形剥片。片面に礫面を大きく残置する				頁岩
2	弥生 甕	－×(6.00)×－　輪積 外面　付加条縄文　下端－ヘラケズリ後ナデ 内面　ナデ　底部－平底、木葉痕	橙褐 普	普 砂粒多 小石微	1/4 以下	胴～底部片遺存
3	弥生 甕	輪積 外面　付加条縄文 内面　ナデ	橙褐 普	普 砂粒多	1/4 以下 胴部片	
4	土師器 甕	(18.0)×－×(4.50)　輪積 外面　ハケ状工具によるナデ　内面　ハケ状工具によるナデ　一部に強めに施されたハケの痕跡　口縁－外反　頸部－「く」の字状	暗褐 普	普 砂粒多	1/4 以下	口縁部片遺存
5	土師器 甕	(20.0)×－×(6.20)　輪積　外面　ハケ状工具によるナデ(一部強めの調整によりハケの痕跡を明瞭に残す)　内面　ハケ状工具によるナデ　口縁－外反　頸部－「く」の字状	暗赤褐 普	普 砂粒多	1/4 以下	口縁部片遺存

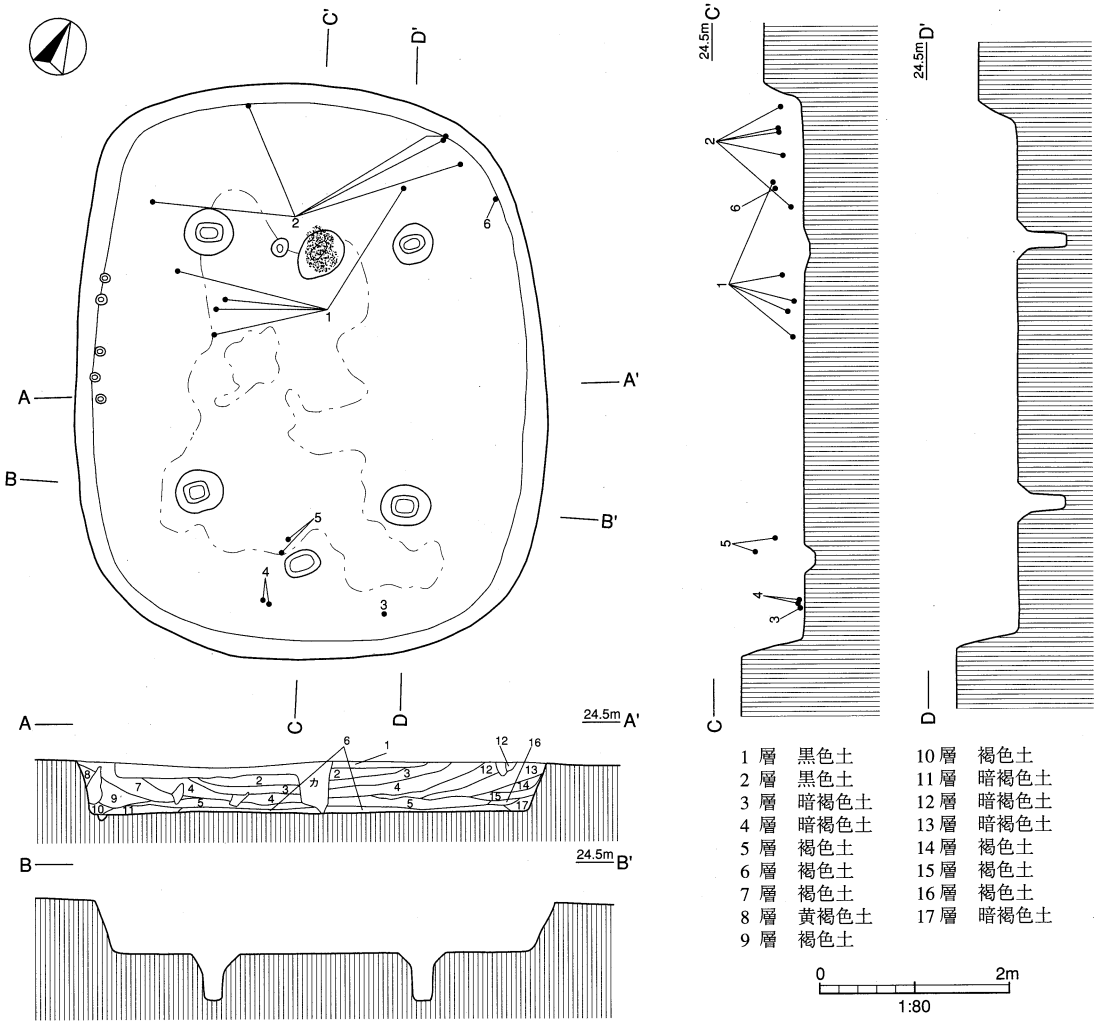


図80　A077

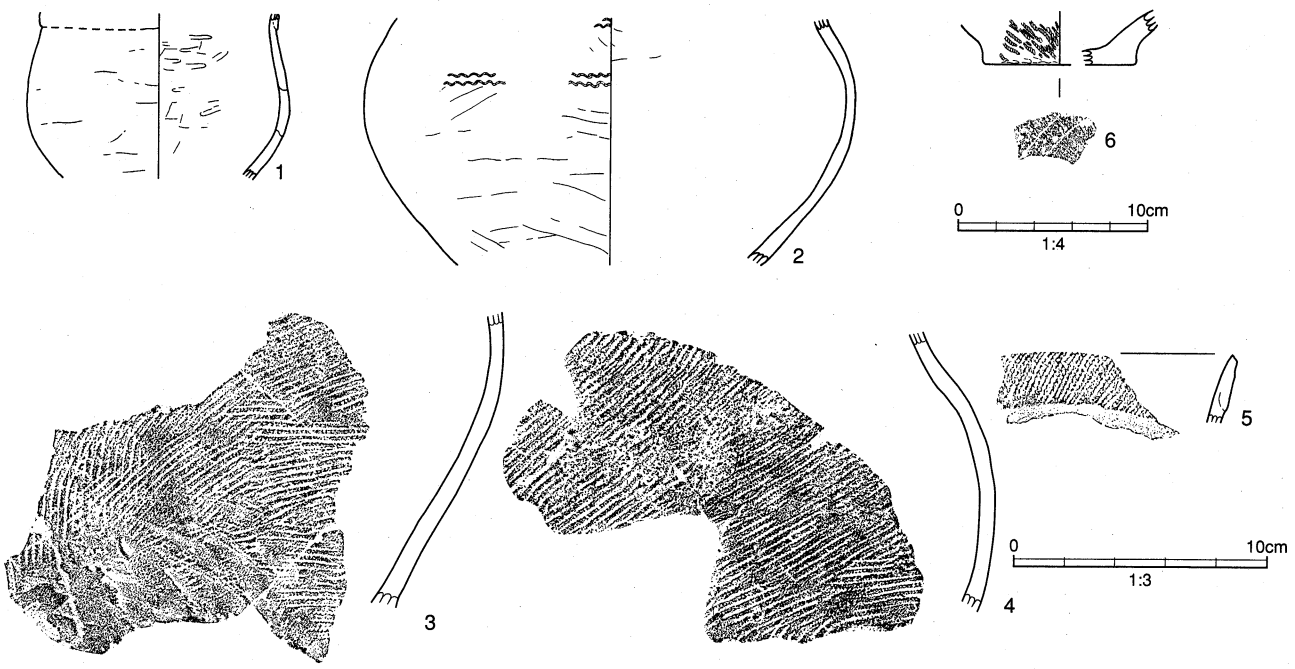


図81　A077(2)

表31　A077遺物観察表　　(単位cm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	－×－×(8.80)　輪積 外面　頸部－輪積痕　胴部－ヘラナデ 内面　ナデ後一部ヘラミガキ　頸部－輪積痕を残す	橙褐 普	普 砂粒少	1/4 以下	
2	弥生 壺	－×－×(13.2)　輪積　外面　全体的にヘラナデを加えた後残存胴部の上位に結節2段(残存で)　中央よりに結節2段施文　内面　ヘラナデ　胴部－中央部が膨らむ	暗褐 普	普 砂粒多	1/4 以下	
3	弥生 甕	輪積 外面　付加条縄文　下端－ヘラケズリ 内面　ナデ	暗褐 普	普 砂粒多	1/4 以下 胴部	外面コゲ状付着 内面スス付着
4	弥生 甕	輪積 外面　付加条縄文 内面　ナデ	暗褐 普	普 砂粒少	1/4 以下 胴部	外面コゲ状付着物 内面スス付着
5	弥生 甕	輪積 外面　付加条縄文　頸部との境目－強いナデ 内面　ナデ	暗橙褐 普	普 砂粒多	1/4 以下 口縁部	
6	弥生 甕	外面　付加条縄文　下端－ヘラケズリ 内面　ナデ	暗橙褐 普	普 砂粒少	1/4 以下 底部	平底 木葉痕

A077

遺　構　　ロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に17層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　　床面直上から覆土中にかけて少量出土。壁際からの出土が比較的多かった。床面直上の遺物としては(3)と(4)の付加条縄文を施した甕形土器の胴部片が挙げられる。

所　見　　出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

A078

遺　構　　ロームを踏み固めた床で、炉の周囲に一部硬化面あり。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　　覆土中から小破片が少量出土したのみ。

所　見　　出土遺物等から弥生時代後期の住居跡と判断した。

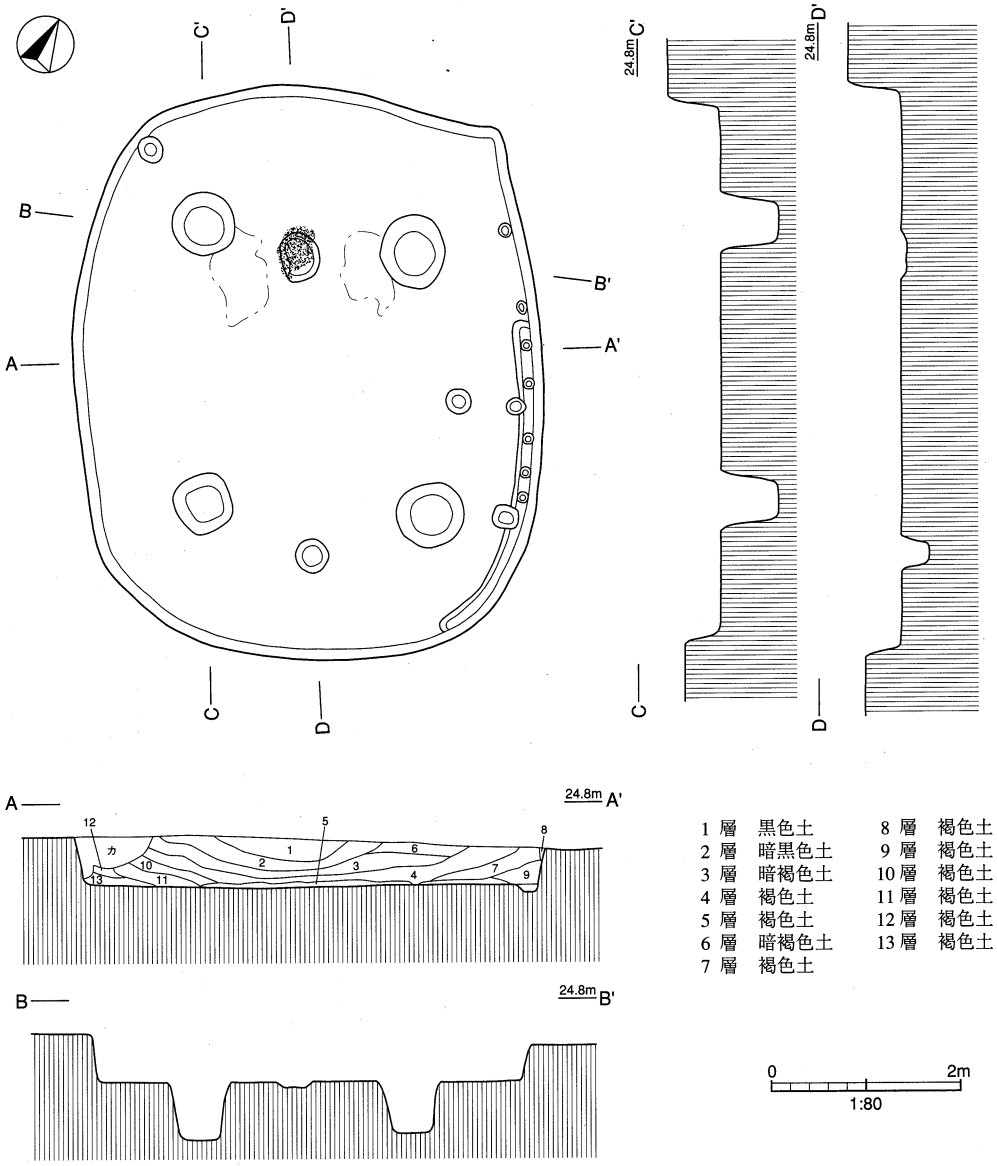


図82　A078

A079

遺　構　　ロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に14層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　　覆土中から床面直上にかけて少量出土した。住居跡南側及び東側コーナーにおいて、出土がやや目立った。

所　見　　出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器と印手系土器が共伴する住居跡である。

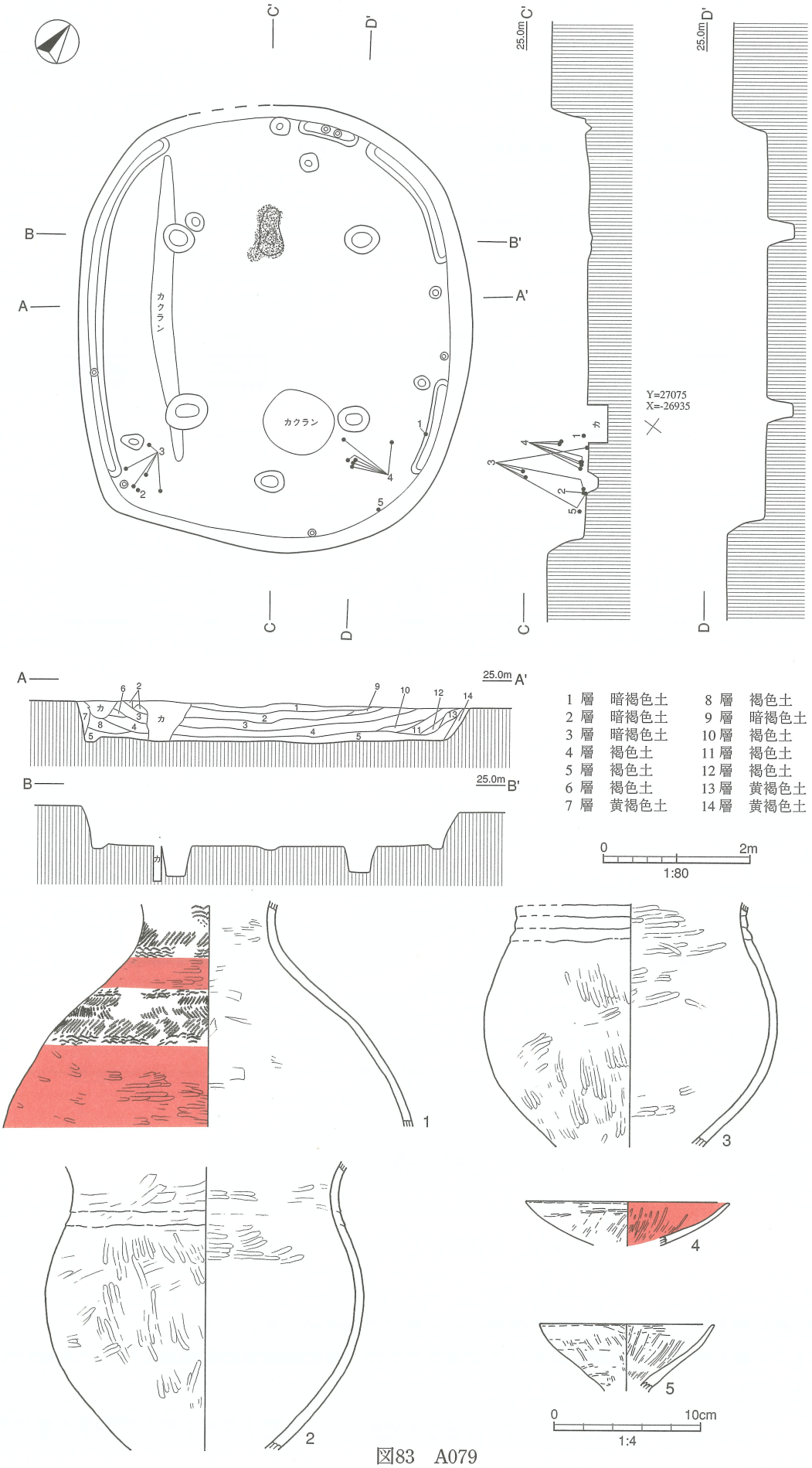

C'
D'
25.0m C'
25.0m D'
B
B'
A
A'
カクラン
カクラン
Y=27075
X=-26935
C
D
C
D
A
A'
25.0m
B
B'
25.0m
1 層　暗褐色土
2 層　暗褐色土
3 層　暗褐色土
4 層　褐色土
5 層　褐色土
6 層　褐色土
7 層　黄褐色土
8 層　褐色土
9 層　暗褐色土
10 層　褐色土
11 層　褐色土
12 層　褐色土
13 層　黄褐色土
14 層　黄褐色土
0
2m
1:80
0
10cm
1:4

図83　A079

表32　A079遺物観察表　　（単位cm）

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	－×－×(15.6)　輪積 外面　頸部・胴部ともに羽状縄文をＳ字状結節文３段で区画 内面　ナデ後ヘラミガキ	明橙褐 軟	粗 砂粒少	1/4 以下	赤彩
2	弥生 甕	－×－×(20.0)　輪積 外面　頸部－ナデ輪積痕を残す　胴部－ナデ後ヘラミガキ 内面　ナデ後一部ヘラミガキ　頸部－ゆるやかに屈曲　胴部－球胴状	褐 普	粗 粗砂粒少	2/3	外面コゲ状付着物
3	弥生 甕	－×－×(16.9)　輪積 外面　頸部－輪積痕　胴部－ナデ後ヘラミガキ 内面　ナデ後一部ヘラミガキ　頸部－輪積痕を残す　胴部－球胴状	褐 普	粗 粗砂粒少	2/3	外面コゲ状付着物
4	土師器 高坏	(14.0)×－×(3.00)　輪積 外面　ナデ後ヘラミガキ 内面　ナデ後ヘラミガキ　口縁－浅めの坏部	明橙褐 硬	普 砂粒少	1/4 以下 坏部	内面赤彩
5	土師器 高坏	(12.0)×－×(4.60)　輪積 外面　ナデ後ヘラミガキ 内面　ナデ後ヘラミガキ　外面よりていねいな調整がされる	明橙褐 硬	普 砂粒少	1/4 以下 坏部	

A080

遺　構　　ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部では、やや軟弱であった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に９層に分層。暗褐色土系の覆土を主体とする。自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　　床面直上から覆土中にかけて土器を中心に比較的多量に出土。壁際に床面直上の遺物がやや目立った。(１)、(２)は、蓋形土器で、覆土上層から下層にかけての出土であった。(10)は、床面直上からの出土で、金属製品が出土したことは注目される。

所　見　　壁柱穴の配列から拡張が行われたものと考えられる。又、柱材は、柱穴の検出状況及び掘削時の所見から引き抜かれたものと考えられる。主柱穴の規模が他の住居跡と比べ大きい事は、こうした引き抜かれた行為に加え、本来、拡張した為に２本分の柱穴が存在していた可能性がある。出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器と印手系土器が共伴する住居跡で、蓋形土器を含め、器種構成に富む。本遺跡では大型の住居跡に属する。

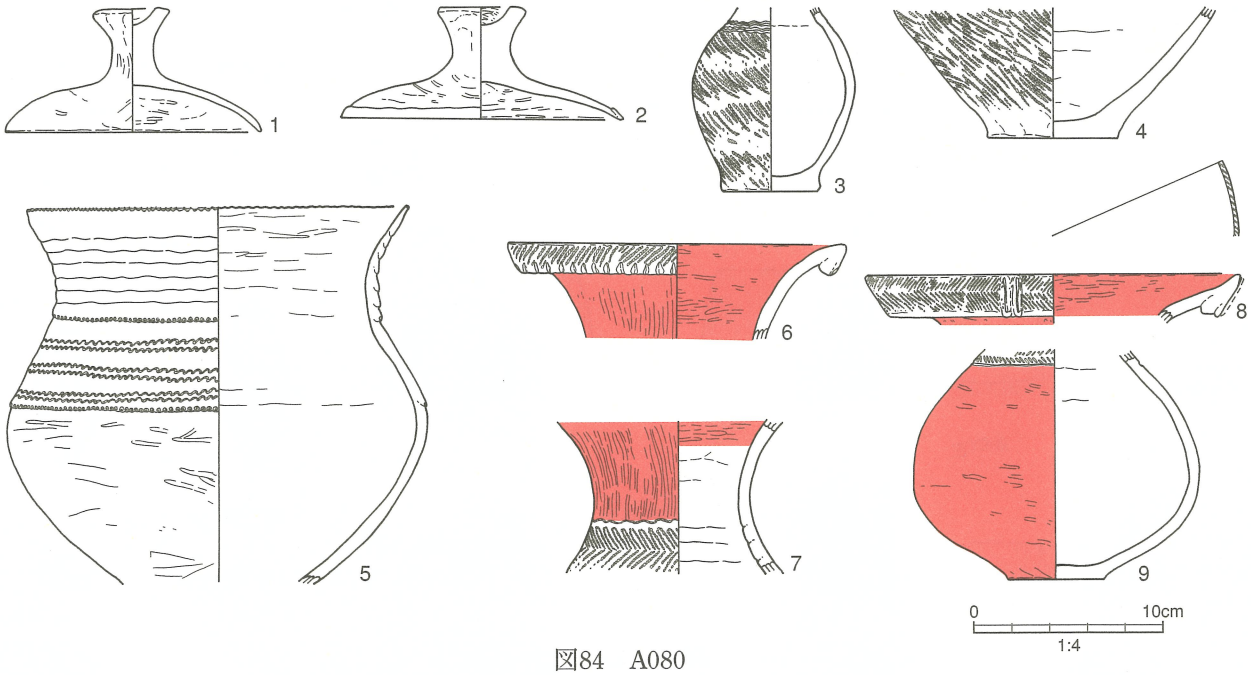


図84　A080

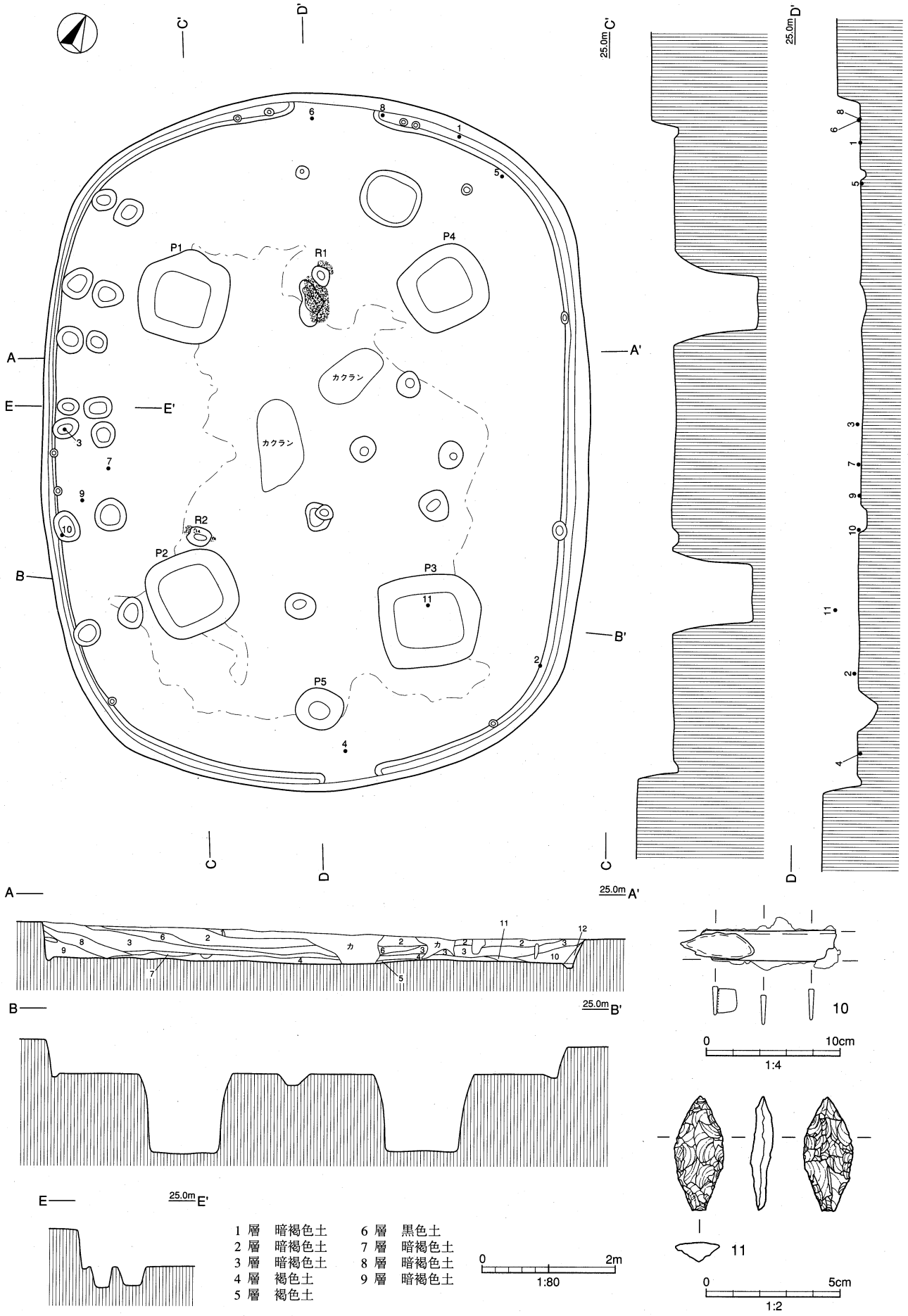

P1
P2
P3
P4
P5
R1
R2
カクラン
カクラン
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
25.0m
1 層　暗褐色土
2 層　暗褐色土
3 層　暗褐色土
4 層　褐色土
5 層　褐色土
6 層　黒色土
7 層　暗褐色土
8 層　暗褐色土
9 層　暗褐色土
0
2m
1:80
10
0
10cm
1:4
11
0
5cm
1:2

図85　A080(2)

表33　A080遺物観察表　　（単位cm）

No.	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 蓋	蓋径13.6×つまみ径4.10　輪積　外面　つまみ部－ヘラケズリ後ヘラミガキ　体部－ヘラナデ後ヘラミガキ(残存一部)　内面　つまみ部上面－ヘラケズリ　体部－ヘラナデ後ヘラミガキ	暗褐 普	普 砂粒少	2/3	
2	弥生 蓋	蓋径15.0×つまみ径4.60　輪積　蓋部－折り返し　外面　つまみ部－ナデ　体部－ナデ後不定方向のヘラミガキ　内面　つまみ上体－ヘラケズリ後ヘラミガキ　体部－ヘラナデ後ヘラミガキ	暗褐 普	普 砂粒少	2/3	
3	弥生 小型甕	－×5.20×(9.80)　輪積 外面　頸部－櫛描波状文　胴部－付加条縄文　下端－ヘラケズリ 内面　ナデ　胴部－長胴　底部－平底	暗橙褐 普	普 粗砂粒多	2/3 頸部～底部	
4	弥生 甕	－×7.00×(6.90)　輪積 外面　付加条縄文　下端－ヘラナデ 内面　ナデ　底部－平底	明橙褐 普	普 砂粒多	1/4 胴部～底部	
5	弥生 甕	20.0×－×(20.1)　輪積 外面　口唇部－刻み目　口縁部－輪積痕を残す。頸部と胴部の境の輪積痕　下端に円形刺突を加える　胴上半－結節縄文２本１組を３段　中央部の輪積痕下端に円形刺突　下半－ヘラナデ後一部ヘラミガキ 内面　口縁～頸部－ヘラナデ後一部ヘラミガキ　胴部－ヘラナデ	暗褐 普	密 砂粒少	2/3	口縁～頸部－輪積痕を残す 胴部－中央部が膨らみ下半すぼまる
6	弥生 壺	(18.0)×－×(15.0)　輪積 外面　複合部－ＬＲ単節縄文施文後下端刻み目　頸部－ナデ後ヘラミガキ　内面　ナデ後ヘラミガキ　複合口縁	明橙褐 軟	普 砂粒多	1/4 口縁部破片	赤彩
7	弥生 壺	－×－×(8.00)　輪積 外面　ヘラミガキ→結節縄文１段→羽状縄文 内面　ヘラミガキ→ナデ(一部に輪積痕有)　頸部－ゆるい「く」の字状	橙褐 普	普 砂粒多	1/4 頸部	赤彩
8	弥生 壺	(20.0)×－×(26.0)　輪積　外面　口唇－ＬＲ単節縄文　複合部－羽状縄文(ＬＲ＋ＲＬ)　棒状浮文の痕跡２ヶ所(２本１組)　内面　ナデ後ヘラミガキ　複合口縁－棒状浮文(２本１組)の痕跡２ヶ所	明橙褐 硬	普 砂粒多	1/4 口縁部	赤彩
9	弥生 壺	－×5.00×(12.2) 外面　羽状の刻み目→沈線→ナデ後ヘラミガキ 内面　ナデ　胴部－やや下半に最大径をもつ　底部－平底	明橙褐 普	普 砂粒多	2/3	黒斑有 赤彩
10	鉄器 不明	11.7×2.10×1.80 2.20×0.40 2.30×0.40　61.2g				
11	尖頭器	4.30×1.80×厚さ2.90　5.3g 小型の木葉形の尖頭器。両面にていねいな調整が加えられている				母石 珪質頁岩

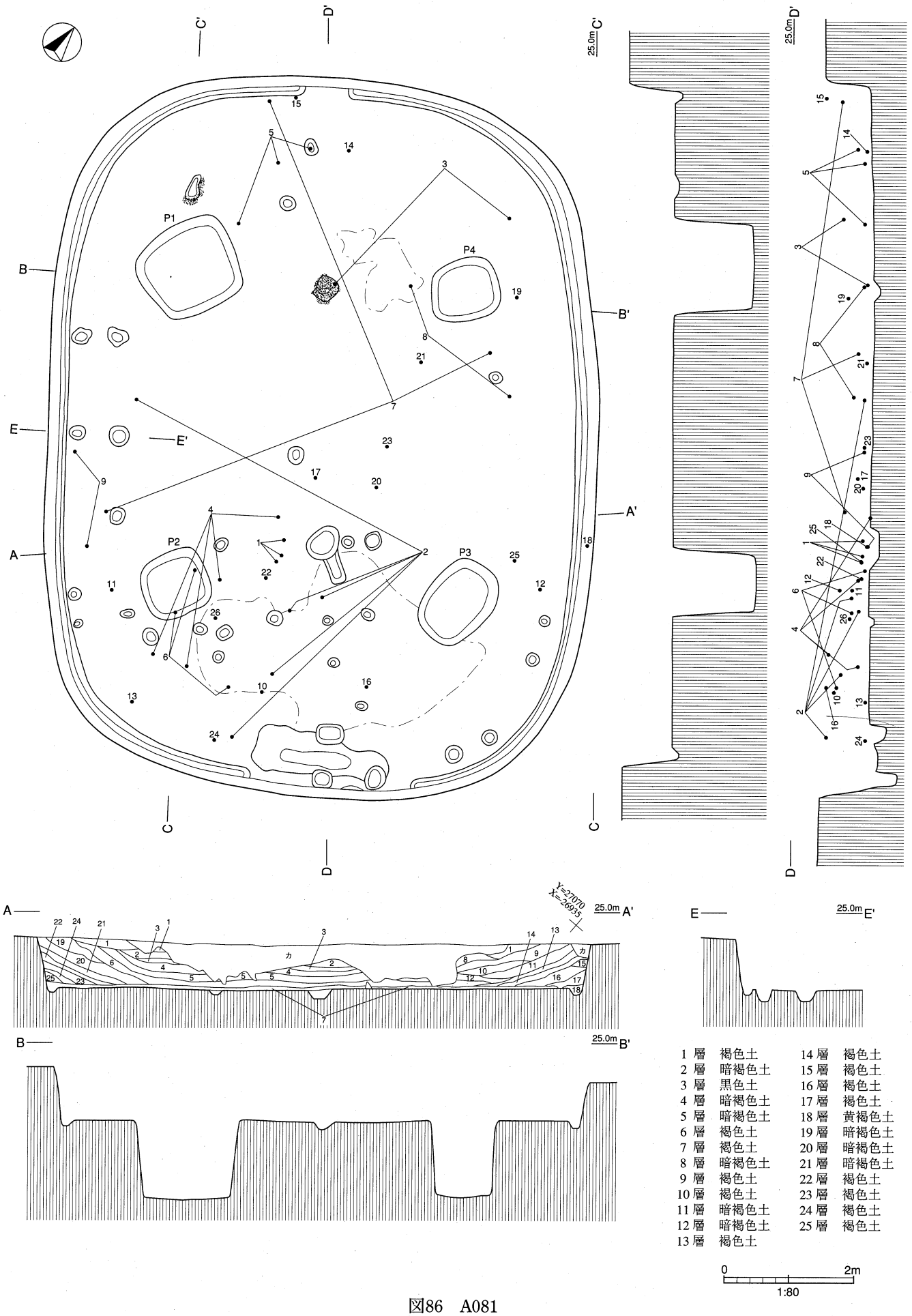
A081

遺　構　　ロームを踏み固めた床で、住居跡南側に硬化面が広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に25層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　　床面直上から覆土中にかけて土器を中心に多量出土。(18)、(19)、(20)は蓋形土器で覆土中層から下層にかけての出土であった。その他、軽石の出土が目立つ。

所　見　　出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器と印手系土器が共伴する住居跡である。本遺跡では、大型の住居跡に属する。



1 層　褐色土
2 層　暗褐色土
3 層　黒色土
4 層　暗褐色土
5 層　暗褐色土
6 層　褐色土
7 層　褐色土
8 層　暗褐色土
9 層　褐色土
10 層　褐色土
11 層　暗褐色土
12 層　暗褐色土
13 層　褐色土
14 層　褐色土
15 層　褐色土
16 層　褐色土
17 層　褐色土
18 層　黄褐色土
19 層　暗褐色土
20 層　暗褐色土
21 層　暗褐色土
22 層　褐色土
23 層　褐色土
24 層　褐色土
25 層　褐色土

0　2m
1:80

図86　A081

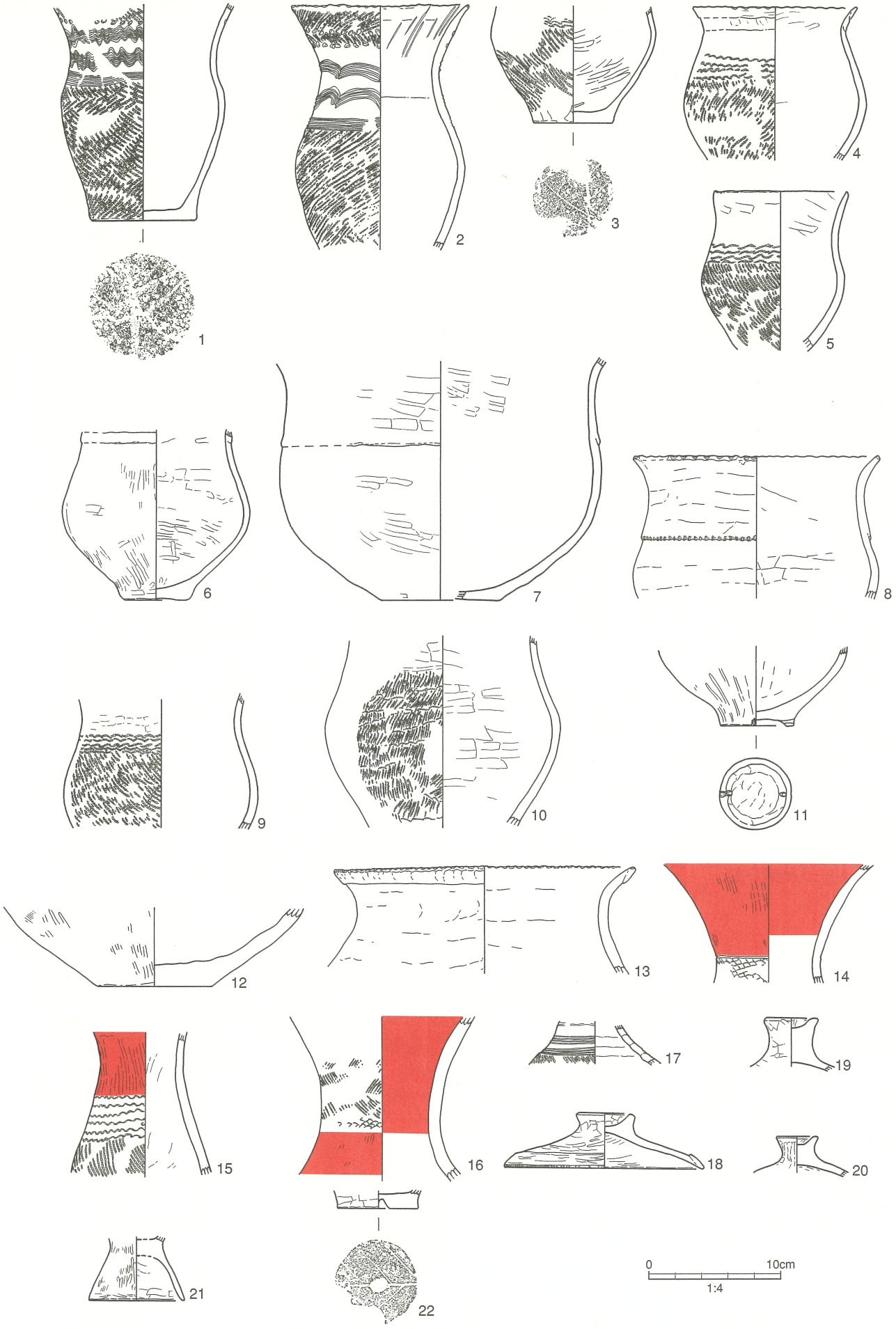


図87　A081(2)

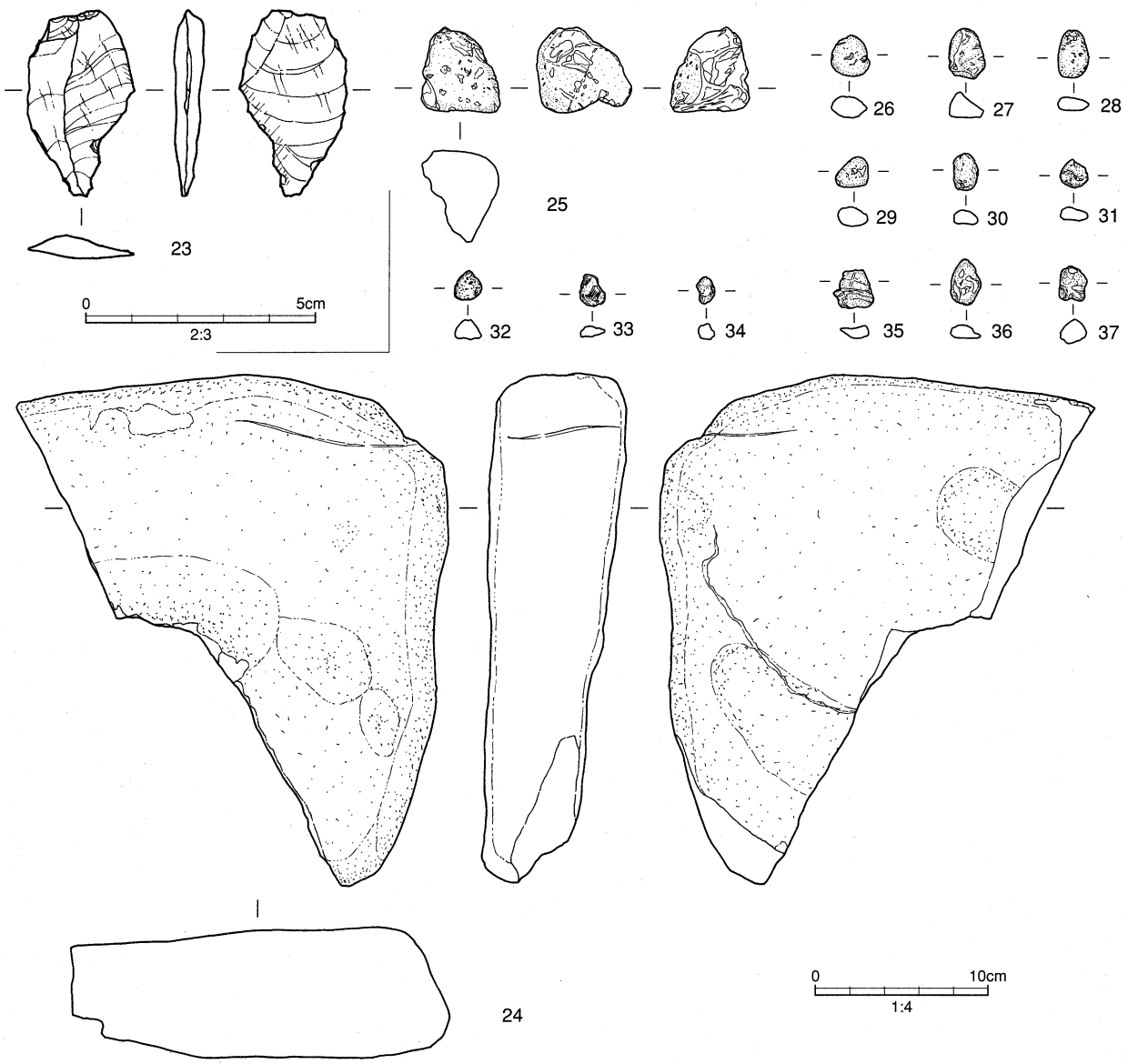


図88　A081(3)

表34　A081遺物観察表　　(単位cm)

No	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	－×8.00×(16.6)　輪積　外面　口縁下部－付加条縄文→棒状工具による刺突　頸部－櫛描横走波状文→櫛描横走文　胴部－付加条縄文による羽状構成　内面　ナデ　器面の剥離著しい	褐 普	粗 粗砂粒	2/3	底部－木葉痕
2	弥生 甕	13.4×－×(18.7)　輪積　外面　口唇－縄文原体の押圧　口縁部－付加条縄文の羽状構成　羽状中央部と末端に棒状工具による刺突　頸部－7本歯による櫛描連弧文２段→櫛描横走文　胴部　付加条縄文	明橙褐 硬	普 粗砂粒	2/3	
3	弥生 甕	－×6.20×(8.90)　輪積 外面　頸部(残存ごく一部)－ナデ　胴部－結節４段→付加条縄文 内面　一部へラミガキ　底部－木葉痕	暗橙褐 普	普 砂粒	1/4	
4	弥生 甕	(12.5)×－×(11.9)　外面　口唇部－押圧　口縁部－輪積痕２段　頸部－ナデ　胴部－結節４段→付加条縄文(２種の異なる原体を用いる)　内面　ナデ後一部へラミガキ　器面の剥離多　口縁－外反	暗褐 普	粗 粗砂粒少	2/3	底部欠損
5	弥生 甕	(10.5)×－×(12.4)　輪積　胴部－中央やや上に膨らみをもつ 外面　口縁～頸部－ナデ　胴部－結節４段→ＲＬ単節縄文 内面　ナデ　口縁－直口縁　頸部－ごくゆるやかにくびれる	暗橙褐 普	普 砂粒多	2/3	口縁～胴部